

OSANAA

Kazuho Sejima

Ryue Nishizawa

インタビュー：安部・小野・奥野・瀬川・藤井

——今日は辰巳駅から歩いてきたのですが、ここに事務所を構えようと思ったのはなぜですか？（瀬川）
妹島 それは、流れ流れて。最初に事務所を始めたのは高輪台、五反田からも品川からも歩いて行ける、ちょっと外れのところでした。

西沢 アトリエ事務所はみな、来年壊される建物とか、地価が安い地域で、とても安い物件を借りたりするのね。家賃が安い助かるから。若い建築家がいるところってしばしば、町はすごい廃れてたりする。でもそういう安い地域というのは、時代の変化でいずれ再開発が来て、地価が上がって、家賃が上がる。

妹島 そうすると出てかきやいけない。品川辺りは今すごい高いところだと思うけど、そこが出なきやいけないことになって。それで恵比寿に。駅のすぐ近くで裏にエビスビールの工場があって、渋谷の隣なのに、当時すごい田舎で、かつ安かった。

西沢 だいたい大きな駅のひとつ隣って、意外と穴場というか、近い割に僻地だったりするのね。上野の横の鶯谷とか。新宿の横の新大久保とか。品川の隣の大崎とか。恵比寿も昔はそうだったんです。

妹島 恵比寿もエビスビールの跡地が開発されてガーデンプレイスになって、地価が上がって家賃が三倍になりますよと突然言われて。そんなの借りれないということになって……それで天王洲アイルに行きました。西沢 倉庫なので、窓なんかなくて、安かった。

妹島 すごい寂しいところに来ちゃったなと思っていたら、だんだん外資の大企業が移ってきて。

西沢 ところが、羽田空港が国際化して、のぞみが品川にも停まるようになって、天王洲アイルの地価が一気に上がった。恵比寿だって僕らが出た時は成田エクスプレスが渋谷に来たときで、ガーデンプレイス効果とあいまって地価がわっと上がった。そうやって都市の裏側が開発されて地価が上がって、安いところを期待していたものづくりの人たちは追い出されちゃう。天王洲アイルの後、辰巳に移ったんだけど、今度は東京オリンピックのムードが始まっちゃって、追い出された。

——この風景とか周辺環境が好きなのかと……（瀬川）

妹島 好きってわけではないんだけど、そういう環境に行かざるを得ない状況になってきて、便利で安いところで探すと、開発が後からやってくる。

西沢 あと我々は、羽田にも成田にも行きやすい湾岸エリアがいいと思っていたのはある。模型も僕らは大きいからいろいろ運び出すのに便利なところがよかった。

妹島 それから私は、水が見たいっていうのはずっと昔からあって。一人で始めた頃、水辺の倉庫が良くて借りたかったけど、単価は安いけど大きな面積を借りなくてはならず、結局全然無理でした。



—— ありがとうございます。色々聞きたいことはたくさんあるのですが、お二人の好きな椅子とか、ありますか？（瀬川）

西沢 妹島さんはそれはまずミース（笑）。僕は、ブルーノ・チエアッテ知ってる？ 僕もミースの家具はどれも好きですが、ブルーノ・チエアはすごい好き。見て好きというだけでなく、座って好き。すごい重くてね・・・すごいいいよ。パルセロナカウチも好き。ですが、しかし寝るときに嫌な夢を見るんだよね。

一同 （笑）

妹島 確かに椅子ってすごく難しい。家よりは簡単に買える。高いと言っても二・三万円から買えるから。だからなんとなくちょっといいなーとか思って集めがちだけど、時間が経ってどうするかとなった時に、絶対これはどうしても残したいというのがはつきりしてくるかもしれない。

西沢 妹島さんは、大橋さんの家具は好きですね。

妹島 そうですね。

西沢 あと僕らは結構、イームズの椅子は多い。イームズのはなんかミースみたいに価値感がすごいっていうのではないんだけど、アメリカ的というか、実用的で好きだよ。あと、コルビジェの椅子も好きなんだけど、「〇」も好き。



—— 体を包んでくれるような？（瀬川）

妹島 包むものはいっぱいありそうなんだけど、包まなくてもいい、勝手にいてもいいというのもありますよね。（笑）

西沢 ヨーロッパの家具は、突き放すよね、建築もそうだけど、すごいよね。コルビュジエとかミースとかっていうのはモダニズムだけど、ほとんど古典主義なんだよね。クラシシズムの中から出てきてる人だから、なんていうか、カッコいいというか堂々してるよね。厚みがあって。彼らにとってモダニズムは、新古典主義とほとんど一体のものでしょね。

—— このマルニチェアは・・・。（瀬川）

妹島 これは意外にずっと飽きないで残ってますね。

西沢 元々これはフリーハンドというアイデアだったの。フリーハンドがそのまま形になるっていう。大量生産をする時に、職人が時間ないからぱっと描いたうさがそのままだ形になるっていう、そういうの面白いなと思ったんだけど、結局減額いるいるで、同じ形になった。

妹島 飽きないで色々やってますね。

—— このテーブルも・・・。（瀬川）

西沢 これは、ボルドーの家で知ってる？ あそこのダイニングルームの朝食用テーブルをお願いされて、これはそのモックアップ。三つでワンセットでいろんな形に組み合わせられる。

妹島 ちゃんとしたダイニングテーブルではあるんだけど、キッチンのご横で一人でも食べられるし、週末にこどもたちが帰ってきたりしたら一緒に食べられる、あとは自分の仕事でも簡単にメール打ったりしたいって言うことから、くっつければある程度大きな面ができ、リング状にもなってバラバラにも使えるみたいな。家具に興味があるの（笑）？

—— 二人の感覚を知りたいと思って。例えば家具の曲線のアイデアとか、建築設計に繋がる事はあるのでしょうか。（瀬川）

西沢 曲線がどこから出てくるか？

妹島 家具でやっていることを家にしてみようっていう風にはならないど、家を考える時に「もうちょっと自分の体がこうなった方がいーかしら」っていうようなこととか、「カクッと折れちゃよりこうなってる方が景色が見えるなー」とか、そういうのって家具で出てくる曲線に近いかもしれないですね。

—— 新しい建築を作りたいというモチベーションは、どこから来るのでしょうか？（瀬川）

—— 同じようなものをずっと作っているような人もいらっしゃるかなと思うのですが。（安部）

西沢 でも、同じようなもの作っているひとでも、それなりに毎回なにか新しいことを思いついてはいると思うんだよ。本当の意味で歴史的に新しいかどうかなんていちいちチェックはしてないけど、なにか今までと違うこと思いついて、よし取り組んでみようというのは毎回、大なり小なりあると思う。それは修復をやってる人だって絶対あると思うよ。



The Shape of Jazz to Come
-Ornette Coleman

* cited from Wikipedia

妹島 確かに、思いつくっていうのはあるでしょうね。小さなことで、ピスがこっちの方がいいんじゃないかとか、「こういうことが起こるんじゃないかな」とかって考える。

西沢 人間はとにかく思いついちゃうんだよね。人間って、大小のいろんな物語を作ったりつづき生きるじゃない？機械は思いついたりしない、機械は物語を作らないのよね。機械は、まったく同じものの再現をやるけど、人間はそうじゃない。物語とともに生きるからね。

妹島 まあでも志としては「新しいものを作る」っていう。このインタビュもそうですね。本当にゼロからじゃなくても、でも新しくもある。既存のものからどうするかっていう風に考えるわけじゃない。いろんな新しさがあるのではないのでしょうか？

西沢 でも、必ずしも新しいことだけが重要かというとそれは違う。オーネット・コールマンの「フリージャズ」っていうアルバムがあって、その前にフリージャズの幕開けになるようなアルバムを出すんだけど、それは「ジャズ来るべき」っていうタイトルで、「The Shape of Jazz to Come」という名だった。まったく新しいジャズの誕生だったけど、でも「new」って言葉は入ってない。「to come」、来るべきもの。今はないものだけど、やがてやってくる、っていうような。つまり未来だよ。僕はそれを見た時に、幻惑っていうか、気が遠くなるような気がした。新しいって言葉を使わないけど、まさに未来がそこにあるのだ、という・・・。それって、ほしいとかほしくないとか、僕らが選べることでではなくて、やってきてしまうもののよね。

—— 若い世代の作るものに対して、これは新しいと感じることはあるのでしょうか。（瀬川）

妹島 私と西沢くんも十歳違うから、相当感覚は違う。その他大勢の人と比べたら近いのかもしれない。でも事務所でもっと若い人で、私なんかが見ると適当な感じだなあと思ったりすることありますよ。新しいかどうかわからないけど、なにかおもしろそうだなーと（笑）。よく言うんだけど、もどんどん適当なところを直そうとするとなんとなく違ったものになってしまっって、また適当に戻そうとか・・・。

西沢 妹島さんは自分を古いってよく言ってるんだけど、どうなんでしょうね。新しい古いっていうのもあるけど、でも片方で、モダニズムっていうのは、新しい古いとちよつと違う、モダニズムは、人間のある種の精神の有り様で、縄文時代にだってあったものだと思う。例えば縄文人が屋根をかけようと思ったら、別に構造計算式はないけど、架構がなんとか成り立つように、工夫して考えるじゃない。そこには理っていうものがあってさ。理を求める精神っていうのかな。そういう合理精神って、新しいか古いかって言うのと死ぬほど古いんだけど、いつもの時代でもあるような、ある種の人間の精神の有り様だよ。モダニズムっていうと19世紀から20世紀初頭のスタイルのことみたいな風に言われるけど、そういうものではなくて、いつの時代でもあるようなある種の人間の態度。これは、古いも新しいもないと思う。



Brno Chair Designed 1929-30_Mies van der Rohe and Lilly Reich (https://www.moma.org/collection/works/3509)
Hannan Chair_Taruzaki Ohashi (https://jp.toto.com/galleria/ex060316/pop/ph_10.html)
Barcelona Couch_Mies Van der Rohe (https://hivemodern.com/pages/product484/knoll-mies-van-der-rohe-barcelona-couch)
Vitro Charles & Ray Eames (https://classdesign.it/dsw-side-chair-vitra.html)
Armless SANAA Chair_SANAA_maruni (https://webshop.maruni.com/its/maruni/2946900000)
Charles Corbusier Pierre Jeanneret Charlotte Perriand (https://cs1cdn.haworth.com/sites/cassina.com/files/le50_brochure_1.pdf)

——モダニズムという精神性は、ある時期として共通認識されています。でも私たちが今、色々やみくもに建築を考えていることの、精神性みたいなものは語れるのでしょうか。今、何をしているんだろうって：。（藤井）

西沢 言っている意味はわかる。

妹島 でもなんとなく課題とか見ていても、やっぱり少し前と全然違ってきてる。横浜国立大学とかへのSPAが特殊なのかもしれないけど、建築の設計しちゃうっていうのが、出てこないじゃない。

西沢 でも今年は出てきてる。

妹島 確かに設計もしてるけど、単体の建築をどう創るかっていうよりももうちょっと：：物語っていう言葉を使っただけど、そういう中にどうやって入っているか、コネクションがあるかみたいな、そういうことを考えてるんじゃないのかな。

西沢 今藤井さんが言った「今自分が考えてることって何なのだろう」っていうのは、一つは自分の個人の考えだからそうなんだけど、モダニズムの人間の精神の有り様っていうのは、個人のもののじやないのよね。ポストモダニズムですら、まだなにか共有できていた。今は、みんなが共有する価値観がこれだって言いづらい。

妹島 言いづらいけど、みんなの発表を見てるとやっぱりどこか共通性がある。それが言葉ではつきり言えてないのかもしれないけれど、そういうことに向けてやってるなという空気を感じましたけど。

——同世代に生きているっていう、どこかその統一感が感じられるという事。（藤井）

妹島 みんながそれぞれ自分なりに考えてるから、ただ勉強して建築はこうだっていうよりは、もう少し自分の時代の問題を考えながら課題を組み立てて設計をしている風に見える。

西沢 確かに。そういう意味では、建築で単体で勝負というより、環境と歴史と文化、その一部としての建築って感じかな。僕らの時代からするとすごい進歩だな。僕らの時代の卒業設計なんて、結婚式場とか、国際会議場をドーン！とか、とんでもないもんばかったもん（笑）妹島 確かに、交通量が多いとか大きいからとか、周りを調べるけど今のリサーチとはちょっと違う。

西沢 今卒業設計で結婚式場作るやつなんていないと思うけど、今はもうちょっと、みんな歴史や文化、地域というもので、建築ってこんな風な形であり得るんだってという風なことを考えてる。

妹島 少し前までそんなことなかったような気がするんだよね。どんな複雑なプログラムとか、構成をこう解きましたっていう、そういうものに行っちゃったような気がする。

西沢 それは本当そうね。

妹島 そうじゃないものを示す時に、どうやって示すかっていうのは難しいと思います。そこで時間なんか出てきて、建築単体でどうかということで無くなってきた、だんだんこうなるだろうみたいなことをどうやって今までの方法で示すか。そういう意味では、小野くん作品は建築的でもありずっと先にどうなっていくんだらうっていう時間を含み込んだ単体であつたから、それを感じ取ってみんな高く評価したんじゃないかと思います。形自体はクラシカルだけど、よく出せたなと。地形の上にあつたっていうのもよかったと思います。全体を通して、もう一回建築っていうものはどういうものであるかっていうのを考えながら作っているんじゃないかなって思いますね。図面の書き方はこうですよというところから始まって、結婚式場はこうだって、シアターはこうだって、機能を考えてこう作りなさいって言われて、こんな立派なものを作りましたっていうものじゃないものを必死にみんな考えてると思いました。

——もう一回建築について考えるときに、その歴史の中から課題を見出すというような過程があるから、作っていくもの自体にも時間軸が生まれるのかなと。卒業設計は特にある大きなテーマから、一つの流れの中で作っていた感じがあります。（藤井）

西沢 それは、そうだよな。

妹島 あとは自分の実感から考えてるような。昔は実感っていうと、ここが気持ちいいとか暖かいとか（笑）今は違う。もうちょっと自分が生きている状況をちゃんと考えているなと。

西沢 昭和の時代は高度経済成長期で、放っておいても未来は約束されていたから、誰も日本の未来なんて考えなかった。でも今、日本の未来って言ったら、少子化、高齢化で、人口が減って、滅亡するしかないのかみたいな、どうするどうするって、ある種の危機があるから、それを考えるようになったっていうのはあるよね。

——それこそ中国に吸収されるじゃないけど、中国にお仕事多いわけじゃないですか。日本ですることがこれからあるのかな。（安部）

西沢 それはあるでしょう。

妹島 でもどうなっていくかわずかしいけど面白い時期ですよな。



妹島 例えばあそこの（事務所内の）シャッターをつけなきゃいけないとなった時。シャッターの機構を全部カバーすればすっきりするんだけど、こんなもんでカバーされてあそこにつづいたら嫌だって言って（笑）最低どうなのかっていうのでカバーをとってもらったりして。だいたい違った部屋の雰囲気になったと思う。それは建築設計していけば、小さいところからどう考えて、どう組み立てるかだから、自分の中の理想っていうか世界像みたいなもので。

——それは自然と：。（瀬川）

妹島 自然じゃないよ、結構真剣に考えてます。



——カーンの言葉で「建築をつくることは世界を作る事だ」というのに対して、西沢さんは「ディテールを作ることは世界を作ることだ」と。どういような事なのか？（瀬川）

西沢 日本人ってディテールって言うとき細部って思うよね。学生が建築見にくとずっと部屋の隅見てたりするじゃない。それは間違いで、建築のディテールって、隅っこって意味じゃなくて、建築にとってディテールっていうのは、全体の風景のことですよ。建築ってコンクリートとか柱とか幅木とか、窓とかタンスとか洗濯機とか、いろんなものがわーっと集まってできるでしょ。多様性の世界だよな。その多様性という風景に、どういう秩序が現れるべきかっていうのは、大きな問題でしょう。すべてがびしっとミニマルに揃ってないないって嫌だっていう建築家もいるし、ライブにわいわいなんてないって嫌だっていう人もいて、いろんな考え方があんだけど、そのビシツとすべきとか、わいわいなるべきっていうのは、ディテールだけじゃ世界の問題でしょ。

西沢 ディテールは、建築家の思想がもつとも現れるところだと思う。むかし僕、ディテールについて文章書いた時に、「ディテールについて悩む、納まりをどうすべきか、帰り道にあれこれ考えている」とみたいなことを書いたのね。そしたら、それを英訳した人が、ディテールっていう言葉を使わずに、*‘‘things come together’’* になって訳したの。ディテールを「ものがどう集まるか」と訳した。僕はそれはいい訳だなと思ったわけ。ディテールっていうとまるで細部をずっと考えるみたいになっちゃうけどそうじゃなくて、いろんな物がどう *‘‘come together’’* するかっていう、どう一つの世界をつくるかっていう。それって要するに、どう納まるかっていうことは、どんな世界を作るか、つてことで、よく日本語で納まったとか納まらないとかって言うんだけど、つまり建築家がディテールを考える、納まりを考えるっていうときそれは、*‘‘things come together’’* を考えているんだよね。

妹島 それはだから都市空間とか公共空間とか、いろんな人がいるときにどういう場所を設計したら一緒にやれるか、ということにつながってくるんだと思うんだけどね。

西沢 そうそう。コルビュジエは、それを建築と呼んだ。都市とか、身の回りの空間とか、建築とか、そういうのをどう構想するか、どういう風に秩序立っていくかっていう、その技を建築と呼んだ。

妹島 家具っていうのも、そういうときに共通性はあるのかもしれない。

西沢 うん、だから、建築見学会のときに、コーナーばかり眺まないでね。

一同 （笑）

西沢 隅っこを見るのでなく、建築全体を見ようとする意思が必要。建物の中に入ると、なんか目に入ったものに集中しちゃうし、部分に注目しちゃう我々がいるじゃない？でもそうじゃなくて、そういう自分を乗り越えて、全体を見ようとする努力は、絶対に必要だと思う。

でもモダニズムの時代は、たとえ隅っこだけ見ても、面白かったよね。ミースの建物なんか、柱一本見てももうミースだもんね。サッシュだけ見てももう死ぬほどミースですよな。独創性の塊というかね。でも今の建物なんてサッシュだけの写真撮ったら、建築家が誰か全然かわかんない。だってサッシュのディテールはメーカーが作っている標準品だから、みんな同じなわけ。昔はぜんぶ自分で考えて作ってたから、サッシュひとつとっても創意工夫があって、窓一つにその人の思想が出ていて、面白かったよね。そういう意味じゃ、細部を見ても世界があるっていうのは、昔の建築だったら誰でもわかることだった。でも今はサッシュとか見るとみんな同じだから、細部に世界があるって言われてもよくわからない。まあいずれにしても、どう組み立てるかということが重要だってことです。



——後世にも残るような建築を作りたいというのはありますか？（瀬川）

西沢 残りたいかどうかでなく、建築は基本的に、後世に残るべきものだと思う。自分の人生で出会わないような、200年前に起きた地震とか台風とかに備えて建てるわけ、建築は、いくら安く作ってもそれは、長寿命に作られちゃうわけね。だからそれは長く残りたいかどうかっていうような、我々が選べるようなことではなくて、建築はひとたび建ったらそれは長く生きるだけの使命と能力を持っている。

——豊島美術館は…。（瀬川）

西沢 どの建物だって、建築は本来の能力から言って百年は持つものじゃないのかしら。もちろん手放しではなく、メンテナンスは必須だけだね。

妹島 ヨーロッパの街並みってレンガとか漆喰とか、木は雨が降ったりしたら外見良さそうに見えるけど実は傾いてるとか、ありますよね。でもあれを壊さないのは、建築だけで終わってないっていうか、街がそれでできてるから、また何度も直さないとっていう風な使命もあるよね。日本だとフリースタンドだから傾いちゃうと、作り直す方がいいかってなっちゃう。大良君（西沢大良さん）が昔言ってたと思うんだけど、江戸時代は火事で木造が焼けたらそれまた経済が活性化されて、逆に言うと、何がエコロジィかって言ったらそこにむしろ作り替えるような、簡単に作れる方がサステイナブルなのではないかと。

西沢 江戸時代、日本では人生三回家建てるもんだっただけど、そのベースには建設費と土地の安さっていうのがあった。火事もすごくて、可燃材の街はよく燃えたし、でも建設も安くて早かった。適度に木を切るから、それは山の保全にもなって、山の大きさと人口のバランスもよかったのだからうな。

妹島 風が入ってきちゃダメだとか、断熱重要だとか、いろんなこと言う結果重装備になっちゃう。そうなるこそうそう壊すわけにも行かないから、今は違う方にシフトしていつている。

西沢 あと日本人は、新しいものの好きっていうのがある。今の人た

ちはずいぶん価値観変わってきたなとは思っただけど、昭和の家素敵っていう、専門的な教育受けてなくてもみんな素敵だなんて思うようになってきたってのはある。でも一般的には、やはり日本では、古いものはダメだよ。ヨーロッパ行くと普通に、物が古いつてだけで、それはいいね、素敵だねって、なるじゃない？日本はやっぱみんな、新しいの好きだよ。新しいものっていうのは、なんていうか、輝いているというか。建築なんかマンシヨン新しくできるとすぐ売れるけど、時が経てば経つほど人気がなくなって、中古って言われるね。

妹島 五十年後、どうなるんだろう。あなた達は見れますね。どういう風に考えてるんだろうね。

西沢 新しいものが好き、古いものの良さってよくわからんっていうのは、世界的に言って異例な民族だし、それが外から見ると面白くも不思議にも思える。でも、日本人の新しいものの好きって、バカにできないところもあって、日本人はとにかく掃除するじゃない。街がピカピカに輝いててさ、ああいうのを見るとすごいと思う。日本の町って、建築にぜんぜん力がないんだけど、でも、ビルが並んでる風景って他の国と違うっていうか、なんか気持ち悪いほど綺麗でさ。ビルの外装から裏通りから毎日雑巾掛けしてるのか？っていう勢いじゃない（笑）？普通じゃないよね。ペリーが日本に来たときにさんざん嫌な目にあったから日本人にすごく批判的なんだけど、アジアに来て初めて毎日風呂に入る連中にあったと書いていた。みんな毎日、夕方になると風呂に入ってる、というのは、自分の旅で初めて見た民族だ、と。それまでのインドとかマレーシアとか、そういうことしないわけ。みんなぐったり汗だくになってる。

妹島 そうなんです。

西沢 うん。とにかく日本の街は、きれいだ。都市としての誇りなんかないし、建築はダメなものじゃと並んでいるけどね。日本の都市が世界に誇れるのは、毎日掃除しているということじゃないかしら。これは宗教的なものだよね。昔僕は、東京って無宗教と思っていたけど、でも今は、すごく宗教的だと思うようになった。ビジネスマンであればあるほど、本気で神棚に祈ってるし。地鎮祭で、みんな本気で祈ってるもんね、タタリが怖いから。海外の地鎮祭はもっとすごい即物的で、いやになるのよね。



——ここ最近でよかった街はありますか？（瀬川）

西沢 最近ではミラノにしか行ってないけど、やっぱりミラノは、素晴らしいなと思う。学生の時はローマとかフィレンツェとかそういう方が断然好きだったけど。今もローマは素晴らしいと思うけど、ミラノは行くたびにいいなと思う。建築に力がある。記念碑的な建築があつまって、街になっているというか……。イタリアはどの町もそうだけど、建築つてすごいって思える都市だね。ミラノは特にそうね。

妹島 すごく変わったと思う、ミラノは二・三年前にミラノで食の博覧会っていうのがあったけど、その前後で、街がすごい蘇ってきたと思います。

西沢 あ、そういう意味じゃニューヨークもそう。ニューミュージアムができた時ニューヨークに行って、いいなと思って、それは〇〇年代に書かれたような怖いニューヨークとは違ってて。

妹島 西沢さんとローマに行って……。だから七、八年前かな。ローマ行って、それからミラノに行って、パリに行かなきゃいけないことがあった。ローマから来るパリはちよつと装飾的だけど綺麗だから良いかなと。だけどミラノはやっぱりどつちつかずかな……。と思ったけどその博覧会前後ですごい街がよくなって、最近はいいなと季節ごとに思います。

西沢 ヨーロッパはどこも素晴らしいですね。パリは、裏通りですら美しい。ヨーロッパって、人間が野蛮だよな。荒々しいというか、人間的というか。強い建築に強い人間、それは素晴らしい。あとはインド、アーメダバードは本当に素晴らしい。プラジルもニューヨークもいいな。ニューヨークも野蛮っていうかね、野蛮だけど、まさに現代を背負っている先端の感じがあってね、人間の感覚が変わっていくっていうのをすごく感じたな。あとニューヨークは、他の保守的なアメリカと違う、なんか独立した精神っていうか、ある意味で都市国家的というか……。都市に誇りがあるね。ニューヨークはいいな。

妹島 ハイラインみたいなものもあるし。この前行ってみたら、MOMAがすごく変わっていた。谷口さんが作ったところの横のファサードを切って繋がるようにして、且つそのためにジャン・ヌーベルが作った全然違うタワーの一部も借りて、ギャラリーを繋げて。一階は全部タダで動けるようにして。昔から有名なフレイック・ジョンソンの庭も、前までは入館した人しか行けなかったと思うけど、そこも行けるようになって。いくつかの縦動線のところからチケットチェックで入っていくて、二・六、七階までわーっといけるようにして。本当に街と一体的にある。なんとなく昔は堅苦しい感じがあったけど、谷口さんがやったところも開かれて、すごく面白かった。

西沢 古いものが残っているっていうことが、逆にこの現代の価値観の先鋭さとか豊かさを感じさせるっていうことがあるんだよね。古いものがあるからって、古臭いってわけでもないんだよね。パリなんかもそうだけどもね。

妹島 これは、卒業設計の作品集をつくる、っていう？毎年やっていること？

——はい、けど今年は内輪で読むだけじゃ面白くないと思って、他の大学に配れるような物にしたいと。（瀬川）

妹島 そういう意味では自分たちがどういうことを考えてるかっていうのをきっちり書くということも大切ですね。

西沢 今年は、例年になくすごい面白いものが集まってきたじゃない？その面白さっていうのは、普通に図面と文字で冊子にして出して、東北とか九州の人が見て、うん面白い！ってものになるかっていうと、簡単じゃないよね。

妹島 だから、みんなが考えていること書いた方がいい。

西沢 卒業設計の講評会に出てもらえば、みんな面白いって思うのに、本にすると、なかなか伝わらない。建築的なDNAミズムっていうのは、図面と写真を普通に並べても、なかなか伝わらない。

妹島 あ、場の空気感とはちよつと違っちゃいますよね。西沢 うん。

妹島 昔はモノ見ないと分かんないって言われて、えっ？！と思ってたんだけど（笑）。この歳になって、モノも重要だつて分かるようになってきたけど、それをどう示すかっていうのは……。フォーマット決めない方がいいんじゃないかな。それぞれの人がどうやって伝えるかっていうのを考えて、それで皆見てさ。あの発表の風景とかがわかると……。

西沢 自分のプロジェクトの面白みがよく伝わるようなかたちにとりやったらできるのか、各々考えた方がいいよ。



SANAA		
1995 年設立。プリツカー賞、日本建築学会賞、金獅子賞他多数受賞。『金沢 21 世紀美術館』、『海の駅おししま』、『ニューミュージアム』、『ルーヴル＝ランス』などの建築設計を手掛ける。		
妹島和世	せじま・かずよ	1956 年
西沢立衛	にしざわ・りゅうえ	1966 年



妹島 MOMA の建物は、それぞれの建築家の連作

で作られているような感覚があつてすごく行きやすい印象をもちました。金沢が街に開いてる美術館って言うけど、本当に立体的に開かれた感じがします。谷口さんがまず二つの通りを繋げたのだと思うけど、他人のビルまで借りてギャラリーにしちゃうぐらいだから、なんか面白いところっていうのはやっぱり、いろんな人がいるんなレベルで街について真剣に良くしているような気がしました。日本ももうちよつとそういう風にならないといけないかな。

西沢 日本は再開発が下手だよな。再開発すると大体ダメになる。パリは、再開発いっぱいやったけど、レアルみたいな失敗例もあるものの、多くは成功している。町の魅力を損なわずにイメージを刷新していくことがやれている。フランス人って、イメージをアップデートしていくのうまいと思う。僕が学生だった頃の〇〇年代って、サン・ローランなんてどんくさい象徴だった。デイオールとか。

妹島 本当？ 最初はかっこよかった。途中でちよつと……。

西沢 うん。でも今や、サンローランってかっこいいってなるもんね。ああいうのはやっぱりヨーロッパ人って強かだなと思う。古いのに、なにか新しさにしてしまうというか。伝統が決して古臭いもの、古き良き物ってだけではない。日本人はなかなか……。彼らのような強さは持てない。

妹島 すごく若いデザイナー入れて、名前は残してクオリティと若さを合わせていて。確かにある時期は若い人から興味を持たれてなかったと思う。

西沢 つまり、歴史的なんだよね、ヨーロッパっていうのは。アジアでは中国が近いんじゃないかしら。

妹島 街が良くなつてるところを見ると勇気づけられますね。いろいろな人がそれぞれに試みてる。

西沢 階級社会の光と影で、いちがいにいい悪いで

はないんだけど、お金が力、というのが、よい結果をも

たらすことがある。知性があつて教育がある人間がお金を持って、すごいことをやる、というのがある。それは僕は日本では、高山で感じたけどね……。でもアメリカやヨーロッパではもっと普通にありうる。日本の場合、美術館の多くは公共事業なので、税金で作るんだけど、税金でやると、議会でオーケーもらって作っていくんだけど、しばしば、他県と同じものにしちゃう、隣と同じものを、みたいになるじゃない？平準化というか。おもしろい人間がいても、そいつに賭けよう任せようみたいなのは、あまりない。アメリカの場合はさ、アメリカで美術館だと〇〇%以上が民間なのね。個人のお金で建てられるわけ。ほとんどみんな私立なの。また、館長にまず権限がすごくあつて、すごい館長イコールお金を集められるひと、みたいな感じ。強いリーダーが大事業をやる、という風潮がまだある。もちろん、変なものだっていっぱい立つけど、いいものも建つ。また西洋は、市民社会が成熟しているのがすごいなと思う。市民に意見があつて、みんな街を、自分の街だと思っている。日本だと、みんななにか、自分の街に無関心なのよね。変なものたつても、へえーみたいな感じで。江戸時代の弊害だと思う。

妹島 昔、事務所に勤めてたアジアの人が、東京は最近つまなくなつたと、十年前ぐらいかな。何がって言ったら「他のアジアの街みたい」って言って。多分他のアジアの街で起こっている再開発が、東南アジアの街のキャラクターを壊していった、同じことが東京でも起こっていて、東京がつまらないところになつてきたということらしい。

西沢 それはあるかもしれませんが。〇〇年代バンコクに行つて、素晴らしいと思った。こんなに美しい街があるのかと思った。むわーっとすごい湿度で、水路があつてトゥクトゥクが走つてて。でもこの間行ったらもう銀座みたいで、残念だった。アジアは日本もタイも中国も、十九世紀からずっとこんな感じで、愛情がない作られ方をしているのは本当に残念なことだ。

——コンペ等の表現について考えることはありますか？（瀬川）

妹島 喋り方とか、声とか？ 案だけでなくいろいろなことが一緒にあらわれると思います。

西沢 それもそうだし、カーンの沈黙と光っているのがあつてさ。存在させようとする時に、例えばヤマ二枚にまとめようとする時に、色々考える。どのようにして、イメージに形を与えて存在させるかっていうの、創造的なことだよな。コンペを出す時、レクチャーの時も考えるの、いくつか自分で言いたいことがあつて、どういう写真を映すか、どういうふうに言うかっていうのは、それなりに考えるよね。形にしてみたら、すごいダメだから、じゃあイメージのほうを改造しなおして、再度形にしてみる、っていう、そういう往復はいっぱい必要だよな。

妹島 自分でレクチャーしながら気づかされる事ってありますね。こういうこと言えるのかなとか、新しい発見があつたり。少し距離を持つて眺めれるからでしょうね。

西沢 自分で言つておきながら、自分でへえって思うこともある（笑）。レクチャーって、みんな聞いているけど、自分も聞いているんだよね。それで言った後に、へえーって、思ったり、今は違っていたとかつて、いろいろ思うんだよね。いずれにしても、物に置き換えてみるって言うのは面白いことです。ぜひやってみてください。

——私たち若い世代にメッセージがあればお願いします。（瀬川）

妹島 基本的に若い人が新しいことを考えられるのだから頑張つてほしいです。いつの時代も、より上の世代の建築家からいろいろなことを学んでその先に自分たちが考えられることをやってきたと思うのですが、これからどういうこと起こるのかとても楽しみです。東京という街はどうなるのかなーと思うところもあります。自分たちが東京に生活するから考えられることがあると思うし、そして東京の街が良くなったという具合になつてほしいと思います。